

てのみである。即ち、只一回突然隆起する代りに徐々に而も幾回も繰り返し隆起作用が起ると認むる、そしてこの結果として、「熔岩脈や熔岩床が幾回となく山軸から進入した結果惹起された膨脹並びに隆起現象」が観察される筈であると。而してその後暫くしてライヌ(W. Reib)及びゲオルグ・ハルツング(Georg Hartung)はバルマ(Palma)及びグラン・カナリヤ(Gran Canaria)の觀察を基礎としてレオポルド・フォン・ブッフの説を猛烈に攻撃した。バルマの火口瀬が侵蝕

の結果出來た事も正しく認められた。斯くして要するに、多くの地質學者(大陸に於いても)にあつて隆起火口説は十九世紀の後半の初期以後すでにその價値を失つてしまつた。大旅行家たるレオポルド・フォン・ブッフは、リバリー諸島の正確なる再精査によつて熔岩流が處によつては全く急斜した基盤上にも極めて多量に實際に凝固し得てゐる事を知る事が出來たので、遂に自己の辯護を觀察の僅少に求むるに至つた。

(未完)

### 御勅使川扇狀地及其の近傍の聚落 (三)

#### 川 手 軍 造

### 三、聚落の立地

#### 1、位置と人文型

本地域は略々N. 35° E. 148°で甲府の西方に位し、文化の漸移地帯である。近來小學校教育の徹底と、交通の發達により主として東京方面

より文化を移入することの二大原因に多大に支配せられて、急激に東京化しつつあるが、尙關西の文化の色彩が濃厚に依存し、又一面表日本、裏日本の色彩も伴なひ、東西、南北の文化の混合地帯である。

言語型や、服装等の對外的のものは關東型になつたが、家庭内の習慣、食物等、內的のものはまだ關西の型が根強く、過去の文化の對照が關西であつた事を物語つてゐる。

かい卷の使用は近世で、明治頃までは關西型の布團が主で、單衣の寢衣は新文化人には用ひられるが、年寄は今尙、赤裸で直接蒲團に入る。即ち北日本にみられる型である。東北の田舎にみられる寢蓐は使用しないが、蓐のすぐり屑を綿の代用とした藁蒲團は、老人、病人の二枚重ねの下蒲團に使用されて居る暖國にみられる、蓐を蒲團の上に敷くことは全くみられない。

これは氣候型が、東北型に近い故であらう。しかし、雪袴、山袴の使用は全々なく、山に行

くも田島に働くにも女は、紅禪をひらめかせて居り、即ち表日本型であるが二三年この方、經濟更生のスローガンにより、處女團員が率先して洋服と雪袴をミックスした作業服を作成してから、老女に至るまでこれを使用し、健氣な大和なでしこの姿がみられる。但し、御勅使川を越えると、「もんぺ」「かるさん」は以前から使用せられて居た。これを姫川白川河谷では「ふんごみ」といふが本地方では股引を、ふんごみと言つてゐる。

詳細は衣食住の項で述べるが、食物も關西型で、關東風の朝味噌汁を用ひることは少く、蕎麥の生産は過去には相當あつたが、現在でも飲食店の看板に「生そば」の字はみあたらず「うむどん」「肉うむどん」が殆ど總てである。本地理區に蕎麥屋はたゞ一軒、小笠原にあるが、それも、つい三四年此方の開業である。夕食には「ほうとう」といふ、多古屋の手打煮込鰻鮓が軒毎に主食又は、かて物として膳に登る。葱も關

西型の青葱を使用してゐる。雑煮は餅をやかず味噌仕立の關西風が多く、刺身は平皿作り盛澤山の江戸風である。家屋の壁は關東型の板壁は極少で、關西型の土壁である。出入口の格子戸は少く、舊家は大戸を下してゐる。屋内には広い土間や板の間が廣く存し、過去の冬期家内工業の作業場とされ、北日本型を遺してゐる。

方言は東山、東海特有の、未來の助辭に、「ず」を用ひ、「行かう」といふ代りに「行かず」といひ、推量の助辭に「ら」「づら」を殆ど使用して居る。「行くだらう」を「行くら」「行くづら」、「したらう」を「しつら」「しとうづら」といふが如きである。打消しの「なかつた」を「なんだ」と關西風にいふ。關東型の「べー」は郡内に限られ盆地内では、相、豆、駿、甲、信に分布の「づら」の使用が顯著で、「もーへー」「へーへー」等を接頭によく使ふ。

「へーお早うございます」

「へーへーおよしんさつて」

又「へー」は關西型の早はやの意にも使はれて居る。「へーけえつて來とうか」の類である。

甲州の方言唄の粹を御紹介する。(・の右側にあるは接頭語)

「こりあ、甲州言葉の名寄せでございます。ほんで(度々)そぜえる(悪ふざけ)わにる(ふざける)のと、出ると出来るの言違ひ、行かず(行かう)かへらす(歸らう)めつけたけ(さがしたか)どつからどこまで申しませう。(申しませう)

おばん(おばさん)ぬぬかや(居らぬか)こんどしよを(味噌こし)いらつて(かりる)いきいす(行きます)へえさいな(はい左様なら)ずんこを(竹ノ皮草履)くんずら(取り替へたらう)おまちねえ(お待ちなさい)さうでこいしよう(左様で御座いませう)そのいちら(そのまゝ)けけて(のせて置く)行つたら(行つたらう)ぶんだしつら(出掛けたらう)。

ほうとうびんたく(煮込饅頭)でしたやけど。どらさぼし(私娼)いしよを(石を)ぶつつけて(投



「へーへー、なんちゆう寒いづらか、おかアん」

「あらあ、ぢようぶ、はらんうつべつちやつとう」  
(母さん)

「(大變)おみやア、おちやめえでどこう、ありつてゐ  
(お前)るでえ、けんごうづでも、ぶつこぼしてくれら  
(洗ひ水)ば、おゝきに樂どうに」

關東型といつても、相模と通ずる點が多い様である。

甲州の言葉は接頭語が多く、語氣が荒く關西人が聞いたら喧嘩の様に思ふだらう。

## 2、地形、地質概説

本地域は中部地方の骨格をなして居る。南彎山系中の赤石楔形地の東部及その東麓、静岡、韮崎の構造線上に發達した御勅使川外諸川の複合扇狀地とである。

赤石山地は辻村助教授によれば、古生代の褶曲が撓曲に依り隆起した端を、斷層により切斷した地塊で、全體として、開析高原の痕跡が存

し、準平原遺物を有して、二輪廻の形態をとつて居るといはれ、田中助教授はこの東側は三段の階段斷層だと論じ、田中元之進氏はこれは差分侵蝕の結果であるとし、從來の斷層説を否定して居る。尙、赤石の名稱は赤色の珪岩の露出によるものである。

赤石楔形地は、大井川の上流俣川の開析により二分され、西半は聖、赤石、東、荒川、鹽見の連峯、東部は間の岳より分岐して白根山脈となり、農鳥岳等が聳えて居る。本邦の三千米以上の高山十四中九まではこの山體に屬してゐる。

この部分は主として古成層で粘板岩、珪岩、硬砂岩より成り、又諸々に紡錘虫石灰岩其他の石灰岩の分布がある。この西縁部は三波川系の變成岩である結晶片岩、石墨片岩、紅簾片岩、綠泥片岩、絹雲母片岩等が存して居る。この地層は、西南日本外帯の内側にあり、その延長は紀伊半島、四國、九州にまで及んで居る。

野呂川縦谷の東側は、西南日本外帯に異例な

花崗岩類が存してゐる。西山温泉より、鯨澤に至る、巨摩山脈の横斷通路の露出は、泥板岩、砂岩、凝灰岩等で、これを玢岩輝綠岩が貫通してゐる様である。蘆安の夜叉神峠を越えて五葉尾根附近に至る間もこれと同一の地質構造で、第三紀に屬して居る。

扇狀地の西方には、御勅使川始め、大和、高室、入増、鹽澤、深澤、市ノ瀬、漆、秋山、戸根、戸、其他の横谷が著しく發達して居て何れも、壯年期の溪谷地形をなして居る。この上流地方には、高尾より高下に至る窪地の珠數狀連鎖がみられ、水をたへて居るものも存する。前述の溪谷及窪地には、ローム層の堆積がない。市ヶ瀬臺地と共に、大石、礫、砂利、泥土等より形成せられて居る。市ノ瀬臺地には、蛇石と稱する十立方坪以上もある巨石が存して居て、北獨逸の巨人石と好一對で、石礫も彼地と同じく、塚にしたり、又、石垣に使用して田畑の傾斜を少にし、流土を防いで、一舉兩得をし

てゐる。河谷の露出崖にも大石がみられ、井戸掘の際も大石を爆發せねばならぬ場合もあり氷河堆積物であることを示して居る。

大和川以下の河川は何れも、微扇を東方に開き、公孫樹を上方から眺めた様な景觀を呈してゐる。この扇狀地には降雨時のみの堆積で形成された美事なものもある。微扇狀地は何れも急傾斜をなし雛段聚落、段畠が發達し、特種の景觀を呈してゐる。山林に近く、耕地も荒地が多いので、山を生活の要素に入れて居る聚落が多い。

御勅使川、戸川を除く河川の大方の水源地は一〇〇〇米附近にあるのは氷河と關係がある様である。山麓附近の溪谷の地形は壯年谷であるが、傾斜が少くなると急激な堆積を行ひ、驚くべき天井川を形成して居る。其美事なもの、小笠原より下流の瀧澤川、古市場の西より下流の坪川、その他戸根川、戸川で主要交通路は隧道が通じてゐる。増水時の危険は言をまたない。

この外人工の堰の堆積もさまざま、何れも天井地形をなして居るが、殊に雄大なのは在ヶ塚堰の念佛坂に於けるものである。近年隧道にしたがをれば以前は交通の難路であつた。この堰は幅一米に満たない狭少のもので、水は四時流れては居ず半午位は涸乾して居る。この開鑿は徳島堰開通と同時に原方の在ヶ塚を水田化したのであるから、今から二六八年前である。僅々この短期間に、高さ約七米の富士山型の砂土を運搬したのである。我々は地形の變化が遅々と

して進まぬ様に考へ、總て、地質時代の何萬年とか何億年とか悠遠な過去と聞かされて居るが本地域の如に變化の多い所では實例を目撃してゐるので、もつと生きた歴史にそくした、地形や地質の學問が望みたい様に思へる。瀧澤川は小笠原の北方を通つて居て、現在の河床は高まり天井川であるが筆者の幼時は殆ど小笠原の道路面と平衡で、その附近で風あげの兒童などみた。小笠原新田の橋の袂の家も道路面に沿つて

居たが、現在は土手から見下す位置にある。この話は、小笠原の人々に確めたが、皆肯定してゐる。

扇央の河は何れも雨期の外は流水がなく、廣い河原が、長々と退屈氣である。

扇頂鏡中條、三惠、大井、五明の南端には湧泉地帯が存して居ることは、既に田中助教の研究がある。鏡中條より北、高砂に至る一線の扇頂は釜無川の頭部浸蝕により急崖を呈して居る。従つて、これを落下する小堰は著しく浸蝕して、V字状をなしてゐる。信玄の治水政策により御勅使川の氾濫は、さ程心配ないが、扇頂の人々は、この釜無の頭部浸蝕になやまされて居を移し、田畑を流されてゐる。

藤田、田島、清水以南、即ちⅩの地域は、増水時には、富士川口の排水量が、河川の量に及ぼす、はゞみ水となつて、高潮の様に逆流する浸水に常に見舞はれてゐる。この地域は、その都度、粘土の堆積がみられる。南湖附近は又、

頭部浸蝕に害されることもある。

扇面の地質に就ては、色々に調査されて居るが、井戸の深さとか、井戸掘の出土とかによる外ない様で、扇端急崖の露出はみられるが、その外は天井川である故如何ともなし難い。井戸掘の人に聞いてみても、正確な報告は望み難い。但し、砂利、小石、粘土等の互層で、各々色の異つたものが交互にある事は事實である。そして、池や、井戸掘、其他の時、墓石、食器、灰、炭等が出土する。墓は残されて居るが、他は逸散して居る。

井戸水の増減は、徳島堰の水の有無に左右せられてゐるものが大多数で、各地にみられる半夏井戸と同様である。瀧澤川の右岸、大井、五明の邊もこの支配をうけて居るといふから、下部はやはり御勅使川の堆積であらうかと思はれる。

扇面の耕地には石を畦に積重ねて塚をなして居るものが散在して居る。

尙微細の地形や地質は明治二十一年の二萬分、明治四十三年の二萬五千分の地圖によれば明瞭である。即ち、河原、荒地は礫砂、森林はこれに近い土質で、桑畑、果樹園はこれより幾分上で又、扇頂、扇端の水田、扇央の雜耕作畑は最上のものとみてよい様である。尙扇端、出水地方に於ける聚落の位置は、附近の高所を示してゐる。

砂礫の大小、及び量は、扇頂より漸次扇央、扇端に少となり、細砂、粘土はこの反對となる。しかし、これには例外が多分にあることを斷つて置く。

こゝに考究せねばならぬことは古甲府湖の持續期間であるが、甲斐の郷土研究者はいづれも湖の存在を有史までと主張して居る様である。筆者も早くよりこれに興味を持ち、その證據を蒐集してみた結果を茲に列記して大方の教を請はんとするものである。

○地理的理由



一、甲府盆地唯一の排水口である富士川の溪谷の起點(鰍澤と思澤の間)禹ノ瀬は疎鬆な集塊岩であるし、又黒澤驛の附近の新道の南側の約二十米斷崖は洪積世の礫層で地質的に新しい、それを切開いたのであるから排水は現世とみて差支へない。

二、飯野村福王子の西方山上四五〇米の箇所  
に厚い粘土層の露出がある。この成因について御勅使川、釜無川、氷河等を考へてみたが、合理的でない。厚い粘土層の堆積は靜穩の水によつてのみなされる。

三、御勅使川扇狀地の扇端邊から現在、生々しい葦の葉が掘り出される。

四、現在も葦間と稱して、葦の群生した濕地が低地に存する。

五、大雨のあつた時、富士川の排水の量がこれに伴はぬ場合は、その水が逆流して、盆地の最低地二四五米邊までは一面の湖水狀を呈したことがある。現在でも沼狀の地形は諸々に存す

る。  
六、南湖、青沼等の地名が、低地に存して居る。

七、蓮澤、一町畑、乙黒、西花輪邊より沼瓦斯が發生し、井戸掘の際、有機物が出る。

○史的理由

一、殘簡甲斐風土記、八代郡の條に北限淺沼とあり、貢物諸種の中、鶴、雁、鴨、鳴、巨麻郡の貢は鴨、鶯、鳩、鵲、鮎、鰯があり。市川郷の條に、春夏之中、土俗以竹網隨海磯待魚來、而取之、一網取數百鱗とある。之等はいづれも、湖沼を背景とした生業であり、この書の作られた當時の狀態を忍ぶに足る。編纂の年代は一般の風土記の作られたのは元明天皇(一三七二)頃で、これもその時のもの、殘簡であるか、又はその後模作されたものか不明であるが、最小限度元明天皇の時代は湖水があつた事となり、その後の模作とすれば、尙後世まで湖が持續せられたこととなる。

二、現在下官地、元、市ヶ瀬臺地にあつた、三輪神社は垂仁天皇の御宇、大和國城上郡三輪神社から勧請したものであるが、その社前は一面の湖水であつた故、今も舊二月二日に船引の祭といひ、舟を模作して、中に御幣を立て、正装した神官が神庭を引きまはす。三輪神社の地形が三方水に圍れた地域であるといふが、大和もこゝも同一地形である。

三、又この時、三輪様の水先案内をした、勅使水先明神が、市ノ瀬臺地の脚土に祭られてゐる。

四、八代の熊野權現にも三月三日御船祭があり、舟二艘を作り右を地頭舟、左を百姓舟といひ、來住當時の首領と部民が別々の舟に乗つて來たことを意味してゐる。

五、この外臺地、山麓の古聚落には、水先、御崎の神社があり、水先案内人か、又は坪を意味してゐるとみられる。本地方附近での所在は左記の如くである。

御勅使川扇狀地及其の近傍の聚落

樋口、上條、築山、塚原、高尾、大窪、十日市場、上宮地、平岡、下宮地、上野(八代)、等。

六、市ノ瀬臺地中麓の南北の交通路を今尙船道といつてゐる。

七、市ノ瀬臺地の平岡及び八代郡上野を市ノ瀬と呼び、舟寄場だとの口碑がある。

八、神祇書卷四に元明天皇の御代千湖との記録がある。

九、山寺の寶珠寺の縁起によれば、本寺の附近まで湖で、住民は時々水害に苦められた。其折行基が通りかゝり、この困苦を救ふべく、一字を立て、佛像を刻んで鎮めたのが本尊の五智如来であると、後行基は、龍王の篠原山で地形をみて禹ノ瀬をひらいたといふ。

十、上古、古本毘古王、鹽見足尼、武津川別命等鵜澤口開鑿の史傳がある。

十一、蹴裂明神、佐久大明神、穴切神社、國母地藏、瀬立不動、法成寺(水去りて土となる

意)の神佛、禹瀨等の地名あるは古人が絶えず治水に懸念してゐた證據である。

十二、盆地の圍邊に舟つなぎの松、海岸寺等の地名が存する。

十三、小夜千鳥、空にこそなけ鹽の山、差出の磯も浪やこすらん。しほのやま差出の磯に住む千鳥、君が御代をば八千代とぞなく。古今集の古歌は、湖邊の情景で、國文の先生方がいふ能登あたりの地名と結んだり、奇をてらつた等といふ解釋は一考の價値があらう。

十四、甲府盆地の最低部には郷名なく、これの撰定新代には聚落がなかつたかとみられる。但し、これは氾濫原でも同様故、薄弱な理由である。

十五、加々美、藤田、南湖と聚落が漸進的に低地へ發達するのも一理由となる。

以上を綜合してみると、古甲府湖は奈良朝頃まで廣範圍に存し、平安時代の末期迄は最低地に一部が存し、其後、土地の昇隆が大なる理由

となり、それに入力が加へられて干湖したものと思へる。但し、湖水の状態は治水の巧に行はれない時は度々一時的にあつたことと思へる。

### 3、氣 候

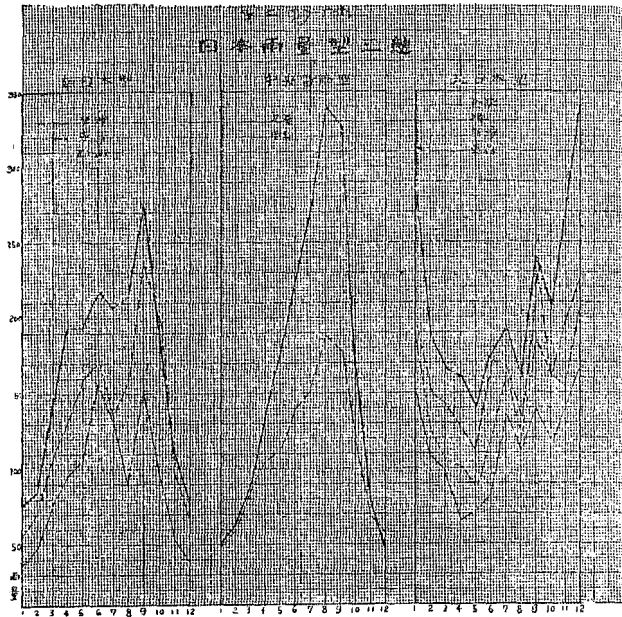
(雨量、温度は斐崎及甲府を標準とす)

四方が山に圍れた地形であるから、沼津より雨量が少く、年雨量、二〇〇〇耗に對して、本地方は一四〇〇耗前後である。松本の一一〇〇耗より少しく多く、東京の一六〇〇耗より少しく多い。

雨量の曲線は、八月を峯とした單一の山形を呈し、雷雨地域である事を示して居る。この型は、群馬、栃木附近によくみられ、足尾、日光等年雨量の相違はあるが、一頂峯の山形型は同一である。

年雨量、其他の點で、東京、瀬戸内と類似はして居るが兩者は七、八月に雨量が遞減して六月と九月の二頂峯型である。山形等も類似型に屬するが北日本型の七月、九月、十二月の二頂峯型である。日本の雨量曲線は南日本型の「六

第二圖



九又は「五・九」二頂峯型、雷雨地域の八月が、  
低くならぬ一頂峯型、「十二・七・九」三頂峯の北

御勅使用扇狀地及其の近傍の聚落

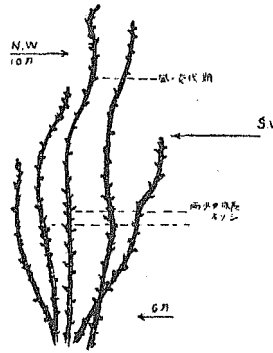
日本型の三種の傾向がみられる様である。

本地域の南方の水田地方及西方の山村は一頂峯型であるが、扇央は、瀬戸内に酷似して、七八の雷雨は降雨があまりない。

風は南日本型の様で九月の末から名物の八ヶ岳下しが吹出し十月の半より翌年の四月末頃まではこの北風が卓越する。四月末から五月にかけて、風の交代期頃、大霜が見舞つたり、五月二十日頃になり春蠶の稚蠶飼育期に入つてから急に、北風に變つたりして農家の膽を寒からしめる。秋は十月がその交代期である。

三澤勝衛氏が行つた様に、柿の枝によつてみると、その生育期即ち晩春から初秋への卓越風が記録されてゐる。又、春蠶上簇後、發芽した桑條は、初夏から、晩秋までの卓越風及雨量、氣温等の記録者である。即ち次圖に示す如き形態となる。芽の間の近いのは、水分の少いたため成長の度合がにぶつたもので、年により異つてゐる。又道傍の力草といふ禾本科の植物の葉も

第三圖



この記録  
者で、くび  
れをいくつ  
かみせて居  
る。  
夏期の草  
越風は富士

川の溪谷から来るものである。春から夏へかけての、南より風、東よりの風は、天氣の悪くなる兆候であるし、風向が西又は北に變ると天氣がよくなるといはれてゐる。

殆ど風のない東北は通風の爲に生門として空け、暴風の他にあまり吹かない東南寄りには便所が設けられて居る。西風は冬期時々吹いたり夜間九時から十時頃又は夜半、突發的に狂的に強く吹いて、一寸驚かしたり、夢を破つたりするが、十分位でやむ事が多く、山地に起る乾燥した Föhn とみられる。

風の速度は各々月の毎秒の平均が二米に満た

ないが、四時吹通してないから、十二、一、二、三、四の月は十米以上の速度の北風は間々あり、疾風程度のもは殆ど毎日吹く。五月の南風も相當に強く雨を伴ふ時が特に大である。秋の荒時の風は柿其他の果樹に大損害を來すことが多く、大粒の柿が收穫を前にして、算を亂して、地肌のみえぬ位落ちる事もあり、この柿は疵がある故、ころ柿、樽柿、さはし柿にはならず實に悲慘である。又よく疾風、強風の吹く時は、古い麥藁屋根をめぐられて、防止せねばならぬことがある。

家屋と風の關係については後章に述べる。氣温は松本程でないが、やゝ大陸的で、寒暑共に著しい。

初霜は十月二十五日頃で、雜耕作時代はこれが作物の發育停止の報告とみて、一齊に取入れが開始される。終霜は大たい四月の末で終つて居るが、山岳地帯の常、桑の芽が出そつた、五月の十日頃になつて、大霜に見舞れることが

間々ある。この爲、春蠶の掃立が遅れるが、間もなく桑は、持直すので他の作物の様な大害はない様である。霜柱は山方、田方に多く、扇面は砂利が多いので、田でも麥ふみはあまりしない。戶外勞働の停止は初雪によつて決定される。

初雪は極つた様に、十二月一日の高尾山の祭禮に降る。

雜耕作時代は富士山の雪や、八ヶ岳、白嶺の眞白くなる事が、樂みでもあり又心細くもあつた。紺碧に澄んだ高原の空にこれ等の白姿がくつきり聳えて、並木の柿紅葉が微い北風に、輕快にばら／＼散つてゐる。うらなりの柿がすき透る様に熟れて、時々鳥の群が訪れる。麥の芽がほんのり、若緑に一寸程のびて、取残しの木綿の綿が白くぼけて居る。桑條や、煙草殻が、鳥の所々に置忘れてあるのを冬籠りの燃料に収集める。木綿も祭へ行く前に收穫する。高尾山へ御參りの道者が、ぼつ／＼通つて少年達の氣をばづませる。

御晝も少しく過ぎた頃あたりが、驟然として桑の葉や、柿の葉をまさ／＼し出し、はうき木の様な防風林の櫛もざわ／＼してゐる。いつか北山も西山も時雨れて粉雪が、ちら／＼舞ひ出したのだ、富士もみえぬ。家々では、軒端に煙草や、ころ柿をつり込んだり、落花生のほしたのや、大根の切干し、柿の皮、芋の洗つたもの等姉さん被りの女達が土間に入れたりする。後れ毛に雪のとけたのが光つてゐる。里高尾の祭のさはぎが手にとる様に聞える。名物のたん切り「かや節」や煮賣家の「こんにやく」を聯想しながら、仕事を早仕舞して、老も若きも祭に急ぐ。間もなく雪も止んで、からりした空になる。初雪はいつも大降りではなく、時雨の程度で終る。秋の訪れに「つくづく法師」が、熟柿を食へとなく様に、冬の訪れには「雪ばゞ」(ぶゆの様な白い羽虫)が舞ふ。少女は、髪<sup>の</sup>毛が黒くなるといつて、争つてこれを捕へてつけるのだ。——筆者の少年時代はこんな風であつた。

終雪は大抵、三月一ぱいであるが、時により四月になる時もある。

	初霜	晩霜	初雪	晩雪
松本	一〇、二八	五、一四	一一、二四	四、七
東京	一一、二	四、八	一一、二五	三、二〇
本地方	一〇、二五	四、三〇	一一、一	三、三一
山形	一〇、二二	五、五	一一、一八	四、八
岡山	一一、八	四、一八	一二、二六	三、二八
鹿兒島	一一、二五	三、二四	一一、五	二、二四

露は朝も夕も殆どなく、小學校の兒童への説明もこまる程度で、海岸地方の様に明瞭にみえない。春秋の雨の霽れる朝や夕等、霧は一寸先もみえぬ程度に來ることがある。露は夏期は夜になると曇る日が多いので少く、せめて夜露でもあればと、扇央の農家をなげかせる。雑耕作時代には「ありまき」がふえるので閉口した。これらの一般に少いのは地面に水分が少い爲と思はれるが、湿度表の年平均は七五%位で東京地方と變らぬが不思議である。

雨量圖に示す様に、雨量は西方の山地に多く扇狀地に少い。等温線も、富士川の溪谷から坤狀に入り込んで、緯度と直角になる特相を現出して居る。即ち本地方は夏期、酷熱寡雨の地域である。しかしこれが果樹、殊に名産の葡萄には夜間の谷風と共によいらしく、名産地即ち葡萄園は甲府盆地の酷熱、寡雨地域に包含せられて居る。

年雨量、一四〇〇耗で、一般の農作物には差支へないのであるが、扇端の湧泉地帯を除く外は、主として砂礫質の壤土であるから水分の包有りに乏しく、且つ、地下水も深い故、すぐ旱魃して、生育困難となり、降雨の少い時に限つて、夜曇りで、露も少く、桑の葉は、夜でもなへて、使用出來ず、貯藏場で霧を吹いて蠶にやる程度で、下葉は黄ばんで時ならぬ秋景色を呈する。玉唐黍も立枯れ、道芝は日中はよれ／＼になつてゐる。歩行の困難實に言語に盡せず、桑が高く頭から被さり、見晴しはきかず、涼風

は來ず、土埃にまみれた、生温い乾いた風が、  
隧道の様な道路をむせかへる様に吹くのみであ  
る。石が凸凹した道路は焙烙の様に焼けて、靴  
に火の様に感じ、跣足等では一間も歩行し兼ね  
る。

それ故根方、原方では現代でも桑島に盛に灌  
水する。これは水田の水番人の餘録で、田の餘  
り水を、飯野、百田邊で、一段三圓、在ヶ塚で、  
四・五圓、豊邊になると六・七圓といふ法外もな  
い價で賣る。急こしらへの堰の水があふれて、  
道路へ一ぱいになり、歩行が防害せられること  
に間々出合はす。又、降雨の際の扇狀地の道路  
は水路となり、雨止みの後には、河原の様な堆  
積や浸蝕がみられる。

こんな状態であるから、夏期の降雨は扇央扇  
頂の人には熱望されるが、田方でこんな必要は  
毛頭認められず、半夏後、地下水の湧出量は増す  
故、畠は水田の一部に地盛りをして作られてゐ  
る。それ故、降雨より日射の方が好ましいらしい

い。かく利害相反する二、地理區は實際問題と  
して、野呂川疏水問題が何百回となく徳川時代  
から持出され、原方の水田化を望まれるが、こ  
の爲、地下水が多量となり、水害の根源をより  
多くする事を憂いる田方人士の反對にあひ、い  
つも立消となり、御流れの話の事を「野呂川問  
題」といつて代名詞に使用されて居る位である。  
これ程に一方は水を欲し、一方は必要もない  
のに夏期の驟雨は、皮肉に水の入らぬ水田地方  
に多く降り、原方に少い。

毎日の様に午后になると、四周の山に雲がた  
れて遠雷が聞かれる。見晴しのよい、土手にで  
ても上つてみて居ると、八ヶ岳から、東方に走る  
雨足の煙つたのや、御坂山脈から甲府方面へ時  
雨れて行く状態が手にとる様に見える。甲府盆  
地の夏期の雨は、至る處で催され、小區域に降  
雨する。富士川の溪谷から北上するものは、西  
山の上を走つて、明るく行き過ぎ、扇狀地へは  
バラ／＼と、たゞ桑摘む人の心をせかせせたに過



ぎぬ場合が多い。又平地へ来るものも、扇頂の水田地方に止り扇尖に及ばぬ。農家は大粒の雨によつて點々と豆の様に印された白い埃の庭を怨めしげに眺めて、長嘆息をなすのみである。

——昭和十一年八月十八日朝晴、午後〇時半、藤田村役場を辭し、徒歩田島、西南湖を経て一軒茶屋に向ふ。四周の山は無氣味に黒ずみ、雲はひく、垂れて、蒸熱く、稻葉の末も動ず、無風。一軒茶屋を過ぎて三軒家に向はんとせし時、微風と共に南方よりぼつ／＼と大粒の雨、雷鳴なし。急ぎ引返し東南湖に轉向、紅白の蓮の花の風情鑑賞の暇もなく歩を急ぎ、聚落の半に來りし頃、雨は愈々繁く、宿はづれの小店に小憩、日照雨明るく、江戸時代の宿場の風情、廣重の晝を思ひ浮べたり。約三十分、止むを待ちて南湖村役場に至る。時に三時十分前、五十分を費し、分間地圖其他を拜見、辭して五明村役場に行かんとして、和泉に入りし頃、東方より豪雨襲來、遠雷有り、附近の民家の門脇に避難、中

々止まず。結局招ぜらるゝまゝに、邸内に入り約一時間を過す。雨止みたれど空晴れず、先程の二驟雨は、尙盆地内を走驅するとみえ、山影明かならず。涼風を滿喫しつゝ徒歩、大師、荊澤、鮎澤を経て、小笠原の橋畔、自動車立場に夕刻到着。

午后の雨の状態を問へば、「ばら／＼雨二回あり」と、成程、地面は埃の立たぬ程度、桑の根本はまだ白く残されたり。

源村行乗合自動車に乗りて、倉庫町の入口にて下車。空暗く、星影なし、涼氣をうけて再び足にまかせて町の過半に來りし頃、背後より、一陣の強風と共に大雨沛然と來る。雷鳴なし、知人の家に駆け入る、時に八時十分前。

「こまつた雨」とつぶやけば、「こまる處か大助かり、先生の歸れぬ程降ればよし」と微笑、飛だ處で、飛だ御叱りを甘受。「晝の雨は」と問へば、「催しばかり」と答ふ。一時間餘り小止みさへなし。惠雨の爲か家内の人の聲ははずむ。

仕方なく傘を借用、歸路につく。——  
夏期の驟雨はこの例ばかりでなく、いつも一日に二、三回の催はみる。そして扇端方面は二回も、三回もこんな雨に出合ふ。しかし扇央は瀬戸内海式に、雷鳴と、蒸熱さを感じたばかりで終ることが多い。

扇央へ來るものは鯨澤の少しく北方の發生のものが降雨率が大である。

「舊來の如く、風が山脈に當つて降雨すると速斷せず、眼にみえない氣流の山脈が各所にあることを考へねばならぬ。海から陸に上る時、山脈に突當つた時は勿論であるが、河川、溪谷があつても、同様に降雨が促がされる。この例は、ミシシッピ河の流域、淀川の流域の如きである」と、築地技師は言はれたが、早川、富士川の溪谷に雨が多いのは縦谷の故とこんな條件も入るのではないかと思はれる。而し一般に平地より山岳地方の雨量の大なことは次の實例でも判明する故考慮の餘地がある。

富士山 八月中に、約一〇〇〇耗。

御嶽山 夏期四三日間に、約七七〇耗で、山麓の黒澤に比し二倍である。

上高地 七月中、七五四耗で松本より六三四耗多い。

水田地方の降雨の多いのは、扇央地に比して冷えた氣流の山の存在と思はれ、扇央の晝間の寡雨は、乾燥して氣温が高い故、上昇逸散して仕舞ふ爲かと考へられる。八九月の夜半降雨が頻繁にあるのは、特別に上空の氣温が低下する故と思はれる。

梅雨、淋雨の状態は、日本内地の各地と大差はない様である。

出産の一月、三月、十一月即ち冬期に多いのは、他地方でも同様、四、五月の發芽期に妊娠率が多い故と見做され、中巨摩郡全體の統計も略々同一の型體をとつてゐる。

死亡率が二、三月に多いのは、極寒と、最高低氣温の開きが人で、氣候不順の故とみられ、

七月の山は、春蠶の過勞や、梅雨、及梅雨晴れの暑さに負けるものとみられる。湿度との關係は明瞭でない。

#### 4、天然資源

本研究地域は殆ど温帯林相である。山地には「ぶな」、「おほなら」、「みづなら」、「つが」、「落葉松」、「杉」、「黒松」、「赤松」、「かや」、「檜」、「もみ」、「ねづこ」、「あらゝぎ」、「櫟」、「こなら」等の混生林が繁茂してゐる。明治四十四年約三十萬町歩の恩賜林下賜時代は濫伐の爲、荒山となり、大洪水を頻出して居たが、其後美林を養成したので水害も少い。

低地の森林は神社の外殆どみられず、僅かに河原に美林の帶狀分布がみられる。「黒松」、「赤松」、「櫟」が主である。この外、浸蝕崖、土手、其他急傾斜地を利用したりして櫟が生育してゐる。明治時代、養蠶の盛大以前は低地各所に美事な林相がみられたが、今は前述の局所に名残を止めて居るだけであるが尙島の畦に松や櫟の

古木が一本位残されたり、一二尺の櫟等が芽を出したりして、過去を物語つてくれる。又荒地に權チクダの木をよくみうける。

又河原には、「針糸んじゆ」、「ポブラ」、「ねじ」、「河原ぐみ」、「野いばら」がみられる。

神社には「黒松」、「赤松」が主で、これに「杉」、「檜」、「櫟」、「榎」等混入され「いてふ」が極く稀にみられる。防風林の家森は、「苦竹」、「櫟」、「榎」、新しいものに「杉」があるが、これ等に、「藤」、「あけび」等がまつはつてゐる。低地植林としては桐が住宅の附近にみられ、柿の木は至る處に列狀又は點狀に分布してゐる。主として澁柿で「ころ柿」、「さわし柿」に使はれる。低地に於ける桑海の中の島は鎮守の森であり、この柿の木である。柿の木は夏の勞働の十時、三時の休憩所となり、この下で農家のお茶が楽しくのまれ、都人のピクニック以上の團欒風景で行人の垂涎を長からしめる。

果樹はこの外、「葡萄」、「櫻桃」、「杏」、「桃」、

「梨」、「寺田杏」、「梅」、「庭梅」、「ぐみ」、「さくろ」、「柚」、「かいだう」、「林檎」、「びわ」、「すくり」、「かりん」等である。

庭木には、松類、杉、檜、梅、アラ、ギ、如柳、やつで、さるすべり、ひいらぎ、檜、楓類、黄梅、木犀、つばき類、沈丁花、椿、山茶花、梧桐、つげ、櫻類、牡丹、柳類、銀杏、高野まき、くちなし、薔薇類、しゆろ、あじさい、木蓮、茶、萬兩等がみられる。

生垣は頗る僅少で、竹藪の背後の自然木を怪しげに組んだのや、桑を利用したものや、樅が飛んで居たりして、計畫的生垣は殆どみられない。寺社、學校、醫院、官署等で、「杉」、「檜」、「あすなろ」等がみうけられるが、都風に刈り込んだものは成育がしがたく、自然に近くのぼして防風林をかねて居る様である。筑後によくある「からたち」の生垣がもと専賣局にあつたが今はあとかたもない、武、相、房、總によくみうける。「かなめ」、「つげ」、「檜」、「榎」、「榊」、「クラ

イミング、ローズ」等の風景はみられず、遠江邊の「樅」もない。刈り込んだ方形の植物といへば、實用から遠ざかつた檜の角仕立位のものである。

關東の平野にみうける、「はんの木」、「枳」等はあまりみうけない。又、關東でよく育つ柘植は夏期の灌水を忘れると、枯死する故、手入をよくして大切にしている。

天然記念物として指定されたものに三惠村の大櫨、一宮村の大杉、山高の神代櫻等が本地域と、略々同一植物帯に屬するものである。

静岡縣の天然記念物の蘇鐵等と全々異相を示してゐる。楠等も殆どみられない。

これで本地方の植物景觀は大たい明瞭になつたと思はれるが、文化の漸移帯であるのと同様植物も多様の分子を含んで居る。

「櫻」、「櫻桃」、「林檎」、「杏」等の南進的植物もよく成育し、北進的植物の「柚」、「茶」、「孟宗竹」、「しゆろ」、「椿」、「山茶花」、「枇杷」等も成

育して居る。これは、冬の極寒、夏の酷暑がよい意味に働く結果かとみられる。柚は、標高、400m, N. 35° 40' の平岡部落に優良品が産出されて居るが、山ふところ、寒風をさへぎり、日射を、込める爲と思はれ、柑橘類の北限とみられる。櫻桃は、地本の山形より早生である爲山形をして脅威を感じしめて居るが、益々發展の如くである。

しかし林檎は、綿虫の被害が多く成績はあまり良好でなく、孟宗竹も、人工的に苦心しても揚子江南地の様な良品は得られず、ずつと形が小さい。東京の目黒邊が、氣候の上からの北限で人工を加へて良品が出ることと思はれる。茶の栽培はあまりみられないが、これは氣候の上からといふより、大産地の静岡に近く、又重量の點から運賃もかさまず、粉茶が安價に手に入るので、發達しないものと思はれる。枇杷も良品は産出されず庭の中の鑑賞樹位の程度である、現在では草本は生活對照として重要性がないと

みとめて割愛する。動物は古北區東亞帶に屬してゐる。

現在は牛馬は、極少であるが徳川時代文化年間には、この附近に、「馬、三五七頭」、「牛、四五六頭」あつた。古代牧馬地であつた故、又南進的な馬の南限であり、北進的な牛の北限地帯とみられる。

南船北馬は支那の交通の説明ではなく、日本の上にも共通の如くである。阪東武者の源氏は馬、西國の平家は船で、其他千早城の正成も、關東の騎馬兵に對して苦心し、眞田幸村は伊達政宗の騎兵を折敷で、甲をぬがせた。馬は人の上は決してふまぬさうである。交通に於ても歴史時代はこの傾向が大の様であつた。

「ざる」、「ぬのし」、「熊」は過去は如何か知らぬが今はみたこともない。「鹿」、「狐」、「山犬」、「むじな」等の話は、老人はよく知つてゐる。

其他の動物も生活資源としての影響が少い故割愛する。

以上は氣候の漸移帶の説明を主として述べ、後述の生産の項に活用の目的で、書いたに過ぎぬ。

魚類は殆ど養殖されず田方地方といへども淡水生魚の需要にみたない。「どぜう」の行商位が尤なものである。

礦物は、御勅使用の上流、蘆安に黃銅礦の埋

藏が多少あり、大正の好景氣時代採掘され、蘆安、源等の村を一時賑したが今は休業してゐる。

「金」、「マンガ」の埋藏も幾分ある様だが問題にする程でもない。

只、石灰岩の利用が出来たら面白からうと思はれる。(未完)

## 世界列強の鑛産資源と鑛業政策 (八)

米國地質學者シー・ケー・レース博士著

近 藤 堅 二 譯

### 第六章 資源保存問題

世界の富鑛床及び鑛産地は既に採掘し盡して涸竭期に入つてゐるか精々良好な處でも衰頽に

向つて居て漸次に低品位の貧鑛の利用が盛になり之が世界的傾向をなしてゐる(第二章參照)。低品位で生産費の嵩む鑛床を悉く勘定に容れるならば金と石油を除外して他の鑛物の將來に於